漁村社会の研究

山岡栄市

村落社会学の立場から漁村を研究しようとする時、どのような視点から研究を進めたらよいのであろうか。社会学一般の立場から漁村の社会や文化、漁民のパースナリティー等に関する諸問題が考えられるであろうが、就中

(一)漁村という社会……農山村社会に対して特に漁村社会とよばれる独自の社会が歴史的に如何にして形成されてきたか。

(二)そのような漁村社会が後背地たる農山村や都市との関連において、或はまた出稼・交易関係等による遠隔地社会との交渉においてどのような社会経済的な影響や変化を受け又は与えてきたか。その現状の分析やそれに必要な範囲の史的分析がまずなされなければならないであろう。

(一)に関連してまず注目しなければならないことは、漁民の出稼や移住による漁撈技術の伝播と、それに伴う漁業生産力の発展、漁村社会の生成過程の分析であろう。そういう点に着目して、私は、漁村部落の屋号を調査し、他国の名(例えば佐渡屋、肥前屋等)をつけている家が、どのような目的でいつ頃その部落に移住してきたかを調査している(屋号に現れない場合もあるので注意する)また漁村部落に発見される蕃政時代の資料にあたってみると大敷あみや四ッ張網等の伝播経路が段々と判ってくるように思う。たとえば出雲は、漁村部落の発達の上から見ると石見よりもおくれており、この事は羽原博士のお説のように、やはり瀬戸内海より長州→石州→出雲へと伝播したようである。併し、出雲の漁村(石州にもそういう漁村があるが)へは、同時に北陸方面からの伝播経路があったようであり、この事は、幕末より明治・大正中期にわたる日本海の運船業の盛大と思い合せて、非常に興味深いものがあると思う。

(二)に関連しては、後背地との社会経済的関係を特に重視したい。いうまでもなく漁業においては、鮮度の高いうちに漁獲物を消費してくれる市場条件を持たない限り、経営規模の拡大は望み得ない。山陰地に島根県の漁村はその後背地が第一次産業に止っていることと、大都市消費地への輸送に時間を要する

ことによって、永く零細経営に停滞し、豊富な漁場を有するにかゝわらず、今日、北九州・山口県等の資本家的大規模経営の圧迫に苦しんでいる・隠岐の漁村はその最も典型的なものである。このような意味において、漁村の村落社会学的研究においても、それを後者地たる農村や都市、大消費地としての市場との関連において考察しなければならないと考える。

(三)このような漁村社会の、いわば巨視的な研究に対応し、その内部構造や機能に着目して、階層分化の問題や、労働力と人口問題、漁村家族の構造と機能、漁村通婚の特質、漁村における機能集団の性格等がその対象として浮かび上ってくるであろう。勿論この場合にも外部社会との関連を忘れてはならないが。

(四)更に漁村の文化形態や、その文化をになっている漁民のメンタリティーが研究されなければならない。こゝでは、漁村文化を規定する自然的・社会的諸条件の分析を行い、漁村社会の宗教・慣行・モラール・政治意識と世論・生活文化水準等々が研究されなければならない。詳細な記述はこゝで省略しなければならないが、私の感じていることを一つだけ述べて結びとしたい。

今日の漁村における文化は、漁山村社会に比して一般に停滞的後進的であるが、かつては、漁村の方が農山村よりも先進的であったのではあるまいか。即ち、文化を運んで来るものがかつては海上交通であり、随ってたとえば廻船業の盛な時代に避難港や風待港としての役割をになった天然の良港は、文化の光が入って来る窓であり、附近の漁村や農村に文化を伝播して先進的役割を果して来たのではないか。いわば文化の光は漁村の前面からへってきたのであるか、陸上交通の発達によって文化は逆に漁村の背後から、即ち都市→農村→漁村という風に伝播されるにいたり、漁村が農村よりも後進的になったのではないかということを私は感じている。

(島根大学)